第十六号　平成十五年四月二十九日（火）発行

稲刈りをした同じ日、五年生の子どもたちは、今年も畑に菜種をまきました。畑は、法性寺郵便局の局長の石川さんからお借りしました。

五年生の子どもたちは、一昨年、菜種をまき、昨年六月、「ふるい」や「とうみ」など、古い道具を使い、10kgとることができました

しかし、一昨年は菜種をまいたときが遅かったので、昨年は、いつもより一ヶ月以上早くまきました。子どもたちのまく様子を地域の人たちが温かく見守ってくださいました。

菜種といえば、かつては、六ッ美が全国一の生産を誇っていたことで有名でした。四十五年ほどまでは、春になると、六ッ美は、「黄色いじゅうたん」が敷き詰められたようだったといいます。これ以後、高度成長の始まりやそれに伴う社会の変化により、菜種の必要性が少なくなってきました。今は、食用として多く使われますが、国産は少なく、中国から安い菜種がたくさん輸入されているそうです。

子どもたちは、菜の花を復活させようと計画し、「自然ランド」（学校の中庭にあるビオトープ）に菜種をまきました。また、子どもたちが、交流しているおじいさんやおばあさん方にも菜種を配り、家や道端にもまいてもらいました。子どもたちは、地道な活動を続けていきました。

さらに、六ッ美と昔からかかわりが深い太田油脂さんは、現在「あぶら館」をつくっています。その展示箇所には、西部小が行っている菜の花の取組の様子が展示されています。これからさらに展示内容を充実させていくそうです。

今年の四月、新一年生は、五年生が育てた菜の花を見ながら入学しました。真新しいランドセルを背負った一年生が、菜の花を背景にお父さんやお母さんといっしょに記念写真を撮っている姿は、とてもほほえましく感じられました。また、昔のような菜の花いっぱいの六ッ美になるといいですね。

―菜の花いっぱいの畑―